

哲学には、言語は外界の要素を言語形式に射映する (map) という考え方 (写像理論) がある。この考え方によれば、状況 (事実) は多くの構成要素に分解でき、それぞれが言語の構成要素と対応する。それに対し、認知言語学では、言語の役割をそのような直接的な射映 (mapping) だけに止めない。特定の状況は異なるやり方で事態把握され (construe)、複数のやり方で言語化され得ると考える。事態把握 (construal) とは、発話において捉え事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みのことである。事態把握は、経験世界の実事関係に基づきながらも、原理的には、外界を意味づけする概念主体 (conceptualizer) の主観や経験的背景、あるいは個別言語の慣習に大きく依存する。


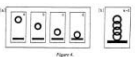
後期ウィトゲンシュタインは、概念主体が事態把握する考え方を持っていたように思われる (家族的類似性の概念は、客体の特徴でなく、対象間・概念間に主体が類似性を見て取ることに基づいている)。

事態把握はアスペクトの概念と結びつく。一つの状況に複数のアスペクトがあり、複数の事態把握があり得ることが、事態把握という概念の前提となっているからである。

アスペクトと事態把握に関しては以下の 3 つの場合が考えられる。

- 1) 一つの状況に一つのアスペクトだけがある + 一つの事態把握を人々が共有する
- 2) 一つの状況に複数のアスペクトがある + 複数の事態把握を人々が共有する
- 3) 一つの状況に複数のアスペクトがある + 複数の事態把握を人々が共有していない

1) の例としてウィトゲンシュタインは、『探究』において「ナイフとフォーク」を挙げている。「ナイフとフォーク」は唯一つの用途 (使用) を持つものとして捉えられる。唯一つの用途を持つとは唯一つのアスペクトを持つことであり、よって人々の事態把握も一通りであることになる。それに対し、2) と 3) のように、一つの状況に複数のアスペクトがあり、同時に複数の事態把握が可能な例がある。視覚像、数列、言語 (語や文) から具体例をいくつか挙げてみよう。(線の左側が複数アスペクトを持つ状況、右側がそれぞれの状況に対応する複数の事態把握である。)

- (視覚像)  —— アヒル/ウサギ、顔/壺、半分アル/半分ソナイ、石/武器/飾り…
- (数列) 1,2,3,5 —— (次の数字が) 7,11,⋯/8,13,⋯
- (言語—語や文) Bank, うつ、かける —— 銀行/ベンチ、(省略)
- (言語—スキニング) <ボールが転がる>  —— The ball fell./ The ball took a fall.
- (言語—メタファー) 才能が花開く、努力が実を結ぶ —— 《人の能力・努力を植物として見る》
- (言語—メトニミー) やかんが沸く、漱石を読む、手を貸す —— やかんの水、漱石が書いた本、助け
- (言語—イディオム) 目がない、腰が低い、歯が立たない、襟を正す —— (省略)

視覚像の例であるジャストロウのアヒル・ウサギ、ルービンの壺に複数アスペクトがあり、複数の事態把握ができることはよく知られていよう。コップに水が半分入っている場合は、水に注目して「半分ある」と見るか、空の部分に注目して「半分しかない」と見るか、複数の事態把握の可能性がある。石にしたって、物体 (石) と見るだけでなく、用途によって武器にも飾りにも、ゲームの駒の代わりにも、ボールにも使うことができる。ある交差点を境に道幅が変わっている状況に対し、「交差点のところで道が広がっている」と見るか、「交差点のところで道が狭くなっている」と見るかはアスペクトの違いであり、視点の違い、事態把握の違いである。

数列の 1,2,3,5 は、素数列だとみなせば次の数字が 7 となるし、フィボナッチ数列 (先行する直前の二項の和の数列) だとみなせば次の数字は 8 となる。数列 1,2,3,5 は複数のアスペクトを持ち、複数の事態把握が可能である。

多義語も複数のアスペクトを持つものとみなすことができる。多義語は複数のアスペクトを持ち、複数の事態把握をされる。

スキヤニングには二つのモード、連続スキヤニングと要約スキヤニングがある。例えばボールが転がるというような、複数のコンフィギュレーション（要素状態）から成るできごと（状況）がある時、コンフィギュレーションを一つ一つ認識して行く（モーションピクチャーのような）やり方を連続スキヤニングといい、複数のコンフィギュレーションを一つのゲシュタルトとして認識する（写真のような）やり方を要約スキヤニングという。同一の状況に複数のアスペクトがあり、連続スキヤニングも要約スキヤニングも事態把握の方法である。

メタファー、メトニミー、イディオムに関しては、それぞれ文字通りの意味と比喩的な意味とがある。文字通りの意味はいわば連続スキヤニングの結果であり、比喩的な意味は要約スキヤニングの結果である。複数の事態把握の結果、複数の意味が認識されるのである。

上述の1)と2)において、人々は事態把握を共有している。ウィトゲンシュタインは「言語を使ったコミュニケーションにとって必要なのは定義の一致だけでなく判断の一致である」（『探究』242）と言う。「判断の一致」には事態把握の一致が含まれているだろう。この2つの場合においては、人々が営む言語ゲームがコミュニケーション不全となる可能性は低いと思われる。しかし3)はどうだろうか？ 言語ゲームに参加する人々が事態把握を共有していないということは、対話者が私の事態把握（意味づけ）を理解できないかもしれないし、私も対話者の事態把握（意味づけ）を理解しないかもしれないということである。コミュニケーション不全となる可能性は高いように思われる。

ここでアスペクト盲という考えを導入しよう。同一の対象や状況に対して複数の事態把握ができない者のことをウィトゲンシュタインに倣ってアスペクト盲と呼ぶことにする。アスペクト盲は、アスペクトの概念を理解できない。これはどういうことか？ ウィトゲンシュタインによれば以下の通りである。

① 対象間の内的関係を把握できない（『探究第二部』247）

② see A はできるが、see A as B ができない（『探究第二部』257）

このうち①については、アスペクトとアスペクトとの間には内的関係があるということである。内的関係があるからこそ、複数のアスペクトが同一の対象や状況の頭れとみなされるのである。②については、ジャストロウのアヒル・ウサギを例にとると、アスペクト盲は、例の図を見て「アヒルを見る」「ウサギを見る」ことはできるが、「それをアヒルと見る」「それをウサギと見る」ことができないということである。see A as B が言えるときには、他の見方（事態把握）を理解していることが前提とされるが、アスペクト盲は視点を変更して他の見方をすることができない。アヒルやウサギが「同一のそれ」の異なる頭れ（アスペクト）であることが理解できないのである。

これら①と②は同一のことを述べていると思われる。複数の事態把握ができた時、その見方を内的に関係づけることができなければ、同一の対象や状況を見ていると考えることができない。つまり、アスペクト盲は、一つ一つのアスペクトを、別々に独立した、相互に無関係の対象や状況を見る如くに認識することはできても、それらに関係づけて、同一の対象や状況の複数アスペクトなのだと思えることができないのである。

ウィトゲンシュタインの二点に加えて私は、アスペクト盲は次の二点もできないと主張したい。

③ 文字通りの意味は理解できるが、比喩的な意味を理解できない（cf.メタファー、メトニミー）

④ 部分（とその和）は理解できるが、包括的な全体は理解できない（cf.イディオム、スキヤニング）
メタファー、メトニミー、イディオム、スキヤニングは、異なる二つの概念を関係づける認知操作である。しかしそれには順次性があり、参照点（reference point）を基に、ターゲット（target）へとアクセスする。メタファー、メトニミー、イディオム、スキヤニングにおいて、文字通りの意味が参照点となり、そこから比喩的な意味へとアクセスするのである。アスペクト盲は、順次性のある関係においては、関係づけができないが故に、参照点しか理解することができない。

ここで想起されるのは、統合失調症患者（かつて分裂症と呼ばれていた患者）が、ダブルミーニング

を持つような表現（ことわざやイディオム、本音と建前）が理解できず、いわゆるオモテの意味しか把握できないという事実である。アスペクト盲と統合失調症患者とを比較すれば、統合失調症患者は概念間の内的関係に障害を持っており、参照点しか理解できず、ターゲットにアクセスできないのだと考えられるだろう。

アスペクト盲は、アスペクト間の内的関係を把握できないが故に、同一の対象や状況が複数のアスペクトを持つことを理解できない。また、内的関係に順次性がある場合には、参照点しか理解できずターゲットを理解できない。このようなアスペクト盲は例外的な存在なのであろうか？ アスペクト盲はたいしたものを見失わないのだろうか？ 私は、上述1)、2)、3)の場合の中で、特に3)において、アスペクト盲は困難を抱えるように思う。

内的関係の順次性があるような言語表現に関して、アスペクト盲はターゲットの意味（比喩の意味）を理解することができない。「あの人は冷たい人だ」と聞けば、「体温の低い人」としか理解できず、「漱石を読んだ」と聞けば、「どうやって人間を読むのだ？」と頭を抱えてしまう。このようなアスペクト盲は言語ゲームの遂行に困難をきたすだろう。

順次性がない場合であっても、アスペクト盲は困難を抱え込む。自分のものとは異なる事態把握が、自分の事態把握と同一の対象や状況に対してなされたものであることがわからないのだ。ジャストロウのアヒル・ウサギの図を見て「アヒル」と捉えるアスペクト盲は、「ウサギ」と見る人が自分と同じ図を見て語っていると理解できないから、「ウサギだって？ 君は何の話をしているのだ？」と反応するだろう。別の例として、ウィトゲンシュタインによって有名となった「1004,1008,1012,・・・と数列を続ける生徒」(『探究』185)を取り上げてみよう。この生徒は、1000までの数字を使った訓練を経て、「+2」をマスターとしたとされるが、1000を超える数になると、1004,1008,1012と続ける。この生徒は、0,2,4,・・・,1000の数列に対して、私たちと異なるアスペクトを見、異なる事態把握をしており（もちろん理解の問題や規則の問題もここには含まれている）、私たちが実践する1002,1004,1006という事態把握が理解できない。つまり、この0,2,4,・・・,1000という同一の数列に複数のアスペクトがあって複数の事態把握があることが理解できないアスペクト盲なのである。彼は、私たちと言語ゲームを続けることができないだろう。こうしてみるとアスペクト盲はかなりのものを失うように思われる。

この生徒のようなアスペクト盲が出現したとき、彼と私たちとどちらが正しいか決めることは、実はできない。それどころか、彼が私たちを理解できないという意味でアスペクト盲と呼ばれるならば、私たちは彼を理解できないという意味で原理的にアスペクト盲と呼ばれねばならないだろう。いくら私たちが圧倒的多数だからといっても何の正当性も与えられない。

言語ゲームにおいて、私と異なる事態把握をし、私の事態把握を理解しないアスペクト盲は決して例外的でなく、ごく当たり前存在している。私にとって面白いものが誰かにとってつまらなかったり、私が皮肉のつもりで言ったことを賛辞と受け取ってしまったり等々は日常的に起こっている。そのような場合、彼がアスペクト盲なのかもしれないし、私の方こそアスペクト盲なのかもしれない。複数のアスペクトを持つ状況で複数の事態把握が理解できない者が言語ゲームに参加するとき、言語ゲームの成立を脅かす「他者」となる。私も彼も他者となり得る。私たちは、アスペクト盲が例外的でなく、上述3)のような場合が言語ゲームの常態だと考えるような言語観を持たねばならない、と私は考える。

【主要参考文献】

Wittgenstein, Ludwig *Philosophical Investigations 4th edition* Wiley-Blackwell 2009

Wittgenstein, Ludwig *Remarks of the Philosophy of Psychology I&II* Basil Blackwell 1980

奥雅博 『『アスペクト盲』は何が出来ないか』 大阪大学人間科学部紀要 15 pp.21-40 1989

永井均 『ウィトゲンシュタイン入門』 ちくま新書 1995

野矢茂樹 『心と他者』 中公文庫 2012

宮本忠雄 『言語と妄想』 平凡社ライブラリー 1994